



宝壽丸太刀の刀身（拓本による）と黒漆鞘 作図 日本考古学協会会員 伊藤博司

刀と彫刻とは別作で、実用ではなく宗教的所要が生じた時に施工されたと考える。三鈷柄の嘴付脇鉄・中鉄・单弁の蓮弁帶・約・鬼目帶など正確である。

俱利迦羅の剣と龍の長40.2cm三鈷柄の握部は鬼目帶と蓮弁帶。龍頭から3.77cmおいて、鋒まで鎬と棟の間の鎬地に長65.2cmの三鈷剣を刻む。柄の握部は菊花半円二つ。刀身表裏を三鈷剣で埋めたのは宗教的要請のためで、修驗の靈山御嶽

の重量を考慮したものか。帶
執金物の一足と二の足の黒
漆の残る葵葉形笠金の間は 18.7
cm、芯々で 24.3 cm。櫛と笠金の
間の裏菊・小刻・甲菊の彫技
は優れる。足は鑄造鑿仕上げ、
底部に鐵付けはない。瓶子形がた
の進化した单脚形で、底部へ
拡がる肉取り豊かな南北朝期
の様式である。一の足の総高
7.62 cm、笠金棟通徑 5.1 cm・足の
厚さ 2.7 cm、二の足各 7.0 cm・
cm・2.6 cm である。笠金に鐵付
けしたと考えられる櫛金は双

補修の漆塗布のため、石矣・芝引・責金物・の旧在有無は確認できない。しかし、南北朝期の大太刀の拵として入念な注目すべき制作と考える。

が図示するように龍頭には逆立つ毛髪が線刻されていたと思われ、耳・角も僅に残る。二分裂した舌とも見える雲氣が頭の背後に靈芝雲となつて拡がる図は佩裏で確認でき、首に魚子ななこを打った首輪を描く腹部の筋ごとに魚子二点、四肢の節ごとに一点を打つ。復元すれば、厳島神社蔵平家納経の経箱の高肉彫龍の図様の系統に近いものとなろう。殿

金剛藏王權現の祭祀に關わる
加飾であろう。

刀身に付属の中世の山銅製
突掛鎧は、長4.2 cm、茎にかけ
るので鞘に入る刀身は123 cm程。
現在残る南北朝時代の山銅造
金物黒漆鞘に入れると約2.5 cm
程納り切れない。全長125.3 cm •
重量530 gの鞘は鞘口部分3.0 cm
程度欠失と推定。木地は針葉
樹製、鎬通りは二重に木地を
埋めた念入りな制作で、刀身

脚に刻みを入れ菊座を止める
櫓の上面佩裏に、一・二の足
を示す符調の刻みを打つ。鞘
口断面は外径縦5.5 cm、横2.4 cm
木地材質・構造、革包の旧状
を示し、南北朝大太刀の鞘の
仕様を伝える。雨覆は、春日
あまおわい
大社蔵錦包太刀のように通常
鞘口まで通るが、これは一の
足までで、幅3.4 cm、長さ42.5 cm
花先部3.4 cmで先の尖とがりは2.6 cm、
南北朝期の様式である。

現在、宝壽丸と称されるこの中世の大太刀は、明治四年四月一七日、「黒漆太刀資壽」の名称で国宝指定を受けた。一方、当社最古の万治二年（一六五九）二月八日の祭礼役儀帳には、「御太刀の役人一番くりから 太良兵衛 二番隱岐院（金銅長覆輪太刀）觀成院」とある。刀身の俱利迦羅龍の彫刻から「くりから」とも称された。「谷合日記」享保一二年（一七二七）三月八日条に、將軍吉宗の神宝上覽のため恒例の祭儀が一ヶ月延引、上覽四品の一つに「俱利迦羅御太刀一振_{是ハ日本武尊御劍土云}」とある。同年二月五日付江戸城より返却の神宝の受領書には「宝壽太刀 一腰」とあり

この太刀には俱利迦羅と宝壽と二つの呼称があつた。享保四年（一七一九）三月卅日付「武州御嶽權現御内陳御神寶」目録には「寶壽具里から三尺九寸」とあり、これを裏付ける。古く当社の祭礼に欠かせない太刀として本殿内陣に伝えられたのである。祭神所用の伝承があつた点でも宝壽丸の宗教的存在感は重い。

の幅広、大鋒の大太刀に、共通する。宝壽丸も長い茎が刃区から9.5 cmも反り上がるが、この中心は太刀の中程で、この騎馬武者が佩く、柄本反の革巻太刀とは対比的である。南北朝期の斬撃戦に対応しての形状である。騎馬武者像には足利義詮（一三三〇—一三六七）の証判が上部にあり、高師直（？—一三五一）像説が有力である。御嶽の宝壽丸の製作年代もこの頃であろう。刃こぼれと、鋒から15.5 cm、刃先より1.5 cmに鎬のある鎌が激突したような痕がある。鍛えは板目に李目を交え、地沸つき、白け気味。刃文は互の目乱れに尖り刃・丁字風の刃。身幅に比し焼刃は狭く

の上、棟よりに浅い線で「寿」の字が確認され、その先に「寶」の字があるらしい。白け気味の鍛え、小模様の焼刃丸棟など、地方製作で、奥州の宝壽の作刀である。その一方、佩表・佩裏一杯に配された俱利迦羅や利劍（三鈷劍）の図、彫技は細緻で、王朝風の龍、正しい儀軌の剣を刻む研磨のため、線刻、毛彫が磨滅し、一見異様な図と印象されるが、稚拙な地方製作とは思えない。刃口まで余白僅に柄頭は位置し、剣は鎬に沿つて平地に寄り、龍は身幅一杯に蛇体をくねらせ四肢を屈伸し、四爪各々は力強く剣を擗んで、龍頭は雲氣を吐き剣先を呑まんとする。「集古十種

黒漆太刀一 宝壽丸

日本風俗史学会会員
青梅市文化財保護審議会委員 齋藤慎

小模様、小足・葉が入り、小
沸つき細かく、砂流しかかる。
莖は生ぶ、栗尻目僅に勝
手下りと錐か。
莖尻から1.3cm。

小模様、小足・葉が入り、小
沸つき細かく、砂流しかかる。
茎は生ぶ、栗尻、鑪目僅に勝
手下りと錐か。茎尻から1.3 cm、
13.3 cmと24.3 cmの三箇所に目釘穴
がある。刃区より目釘穴の鎬

小模様、小足・葉が入り、小
沸つき細かく、砂流しかかる。
茎は生ぶ、栗尻、鑪目僅に勝
手下りと錐か。茎尻から1.3 cm、
13.3 cmと24.3 cmの三箇所に目釘穴
がある。刃区より目釘穴の鎬

調査には、友人伊藤博司・寺本靖・北村和寛氏の協力を得た。伊藤氏には作図を、寺本氏からは制作者の立場での助言を頂いた。また「刀剣全集」所収の石井昌国氏の「上古刀・古刀」と、「刀剣美術」441号所収、辻本直男氏等五氏執筆「美術館・博物館めぐり三六」の「武藏御嶽神社宝物殿」の学恩は貴重であった。

南北朝期の様式である。
花先部 3.4 cm で先の尖は 2.6 cm、
幅 3.1 cm、長さ 42 cm
補修の漆塗布のため、石突・
芝引・責金物・の旧在有無は
確認できない。しかし、南北
朝期の大太刀の柄として入念
な注目すべき制作と考える。

脚に刻みを入れ菊座を止める
櫓の上面佩裏に、一・二の足
を示す符調の刻みを打つ。
口断面は外径縦5.5cm、横2.4cm
木地材質・構造、革包の旧状
を示し、南北朝大太刀の鞘の
仕様を伝える。雨覆は、春日
大社蔵錦包太刀のように通常
鞘口まで通るが、これは一の

て平地に寄り、龍は身幅一杯に蛇体をくねらせ四肢を屈伸し、四爪各々は力強く剣を擗ふんで、龍頭は雲氣を吐き剣先を呑まんとする。「集古十種」

方、佩表・佩裏一杯に配された俱利迦羅や利剣（三鉢剣）の図、彫技は細緻で、王朝風の龍、正しい儀軌の剣を刻む研磨のため、線刻、毛彫が磨滅し、一見異様な図と印象されるが、稚拙な地方製作とは思えない。刃口まで余白僅に柄頭は位置し、剣は鎬に沿つ

小模様、小足・葉が入り、小沸つき細かく、砂流しかかる
「茎」は生ぶ、栗尻、鑪目僅に勝手下りと錐か。茎尻から1.3cm
13.3cmと24.3cmの三箇所に目釘穴がある。刃口より目釘穴の鑪
の上、棟よりに浅い線で「寿」の字が確認され、その先に「寶」
の字があるらしい。白け氣味の鍛え、小模様の焼刃
丸棟など、地方製作で、奥州の宝壽の作刀である。その一